

〈奈須与市語〉演出の歴史

田口和夫

狂言方で重要な習物に位置づけられ、若い狂言役者が節目に演じる習慣がある(奈須与市語)については、小稿を草したことがあり、小著『能・狂言研究—中世文芸論考—』に収めた。このアイ語りの上演についての主要な資料を網羅したので、ここではそれを引きながら、この替アイの成立と定着の歴史を振り返ってみることにする。

最古の上演記録は織田信長の時代に遡る。ワキが(那須ノ与一)を所望している。

1 永禄十一年(一五六八)十月二十二日、將軍足利義昭を信長が招いた時の能で、

二番目八嶋也。御酒ノ中ニ、進物共上ル。

八嶋ノトキ、胴甲上ル。(観世小次郎)元頼、頓而、アイニ、那須ノ与一ガ扇ヲイ

タル処ヲ所望。其儘弥右衛門カタル。(『近代四座役者目録』)

『永禄記』によれば、公方様(義昭)から信長が「腹巻(胴甲どうよろいと同じ)」を拝領することになっており、その方が正しいらしい。

い。(八嶋)の常のアイは確認できる限りすべて景清と三保谷の鑿引きの語りで、甲の鑿が引きちぎられる処が眼目である。ワキの元頼は、腹巻下賜という場面でこの語りがふさわしくないと判断して「那須ノ与一ガ扇ヲイタル処ヲ所望」したのであろう。勿論、役者大藏弥右衛門がこれを語れることは承知していたということになる。この語りは「虎明間狂言本などには「那須与一」とあり、元来は、扇の的の風流が演じられる能「那須与一(延年那須与一)」の間であったか。(橋本朝生氏『狂言記』注、新日本古典文学大系)とされる通りであったろう。近世には独立して上演することも多かったようで、狂言記に語り部分だけの本文が収録されているのもその証となる。永禄ごろに独立して上演された証拠は管見にないが、あり得たものと考えたい。ただし、その頃の演出が現在の様な仕方咄であったかどうか。狂言記の挿絵は、舞台の真ん中で葛桶に腰掛けた形で描かれており、狂言として上

演された時の姿と推測されるが、これでは現在の演出のようなダイナミックな動きは期待できない。近世初期でもそうであったとすれば、それ以前についても同様で、狂言(文蔵)の軍語りと同様、基本的には制約された範囲の仕方咄であったろう。もつとも、アイとして演技する場合は葛桶に腰掛けない訳だから、かえって自由に仕方を工夫することはできた筈ではある。

能(八嶋)の上演に当たって、このような替の演出が可能であることは、当然語り継がれ、役者側でも伝承されることとなる。特に信長時代からの伝統を誇る大藏流においては、自流の特色としてこれを広め、併せてその演出に心を用いていたに違いない。その効果は確かにあった。第二の古記録は、観客である主催者がこれを所望している。

2 慶長八年(一六〇三)七月八日、二条城における徳川家康主催の会、(翁)〈白楽天〉狂言(鴈かりがね)の後、シテ金春七郎の(八嶋)があり、アイは大藏弥太郎虎清、その注記に「語かゝり候時、御使ニテ那須ノ与一扇イタル所御所望」(『古之御能組』)とある。

家康がこのような「所望」をするのは、そのような先例—信長の時の—を知っていたからに違いない。それは役者側、大藏流から、このような先例があったということが知られていたからと考えるのが自然であろう。ここでは虎清が常のアイ語りを語り始めた時、使

者が「しばらく」と留めて、家康からの命を直接虎清に伝えたということになる。これがまた先例となる。それは観客からの命ではなく、同じ部分でワキがアイの語りを中断させ、(那須与一)を語らせるという演出として定着するのである。ちなみに、この催し終了後、家康はこの催しに出演した狂言役者、長命伊右衛門(後の鷺仁右衛門)・大藏弥太郎・長命甚六を呼び、「狂言出来候」と褒め、手ずから「金子一枚づゝ」を与えている。

大藏虎清の『間・風流伝書』の(八嶋)に、「わきよりなすの与市扇をいたる所所望する事あり、それは所定申也、口伝これあり」と記されるのは、これが先例となつてゐる事を示す。「定まり申す所」とは、ワキが語りのどの部分を遮るかが定まつていたという事であろう。虎清の子虎明の『わらんべ草』に、「与一のかたりやう、いろいろ習あり」とある。アイについての記事の中で、「語り様」について言及したのは、この項だけである。仕方咄の存在が想定できる。仕方咄である証拠は、貞享四年(一六八七)以前に成立した筑波大学図書館蔵西村本『間之本』(那須与一)の注記に見える。

始より所望する時ハ常ノせりふにて、古キ人のしかたにてかたられ候間、我等もしかたにて語て聞せ申さうずるにて候、又間のうちにおさゆる事あり、ワキ、暫込の事に那須与一扇を射たる所、語て御聞

せ候へ(飯塚恵理人氏の翻刻あり)

ワキの所望のタイミングが二つある事が「習」なのであろう。始めからの場合と、語り始めた所で「暫」くと抑える場合とがある事が知られる。「古キ人のしかたにてかたられ候間、我等もしかたにて語て」とアイの方から言うのは異例である。この語りが所作の繁簡はあれ、仕方で語るといふ習慣が「古」くから一少なくとも虎清時代から確立していた事を示している。

宝永七年(一七一〇)吉田喜太郎の『大藏流間狂言仕方附』には(八嶋の間那須)があり、仕方附と上演の心得が記される。「那須ノ時は、脇方より所望する也」として、アイが語り始めた所を「暫」と抑える箇所を三か所あげ、

但シ、今は大かた云合次第也、然共、右押へ所ワキ方ニ知る事也、(中略)俄ニワキより所望スル事アレバ、其心得なくてハうろたへ申物なれば、心懸申べき事専一也という。

ワキ主導で、この仕方咄が演じられる習慣がまだ存在していたのである。

文政十二年(一八二九)以前の山脇元業の雲形本による古典文庫本(那須与市語)には、定着後の詳しい演出が記される。

アイが語り始め、「海上に控へ給ふ」と進んだ所で、ワキが「姑く、迎の事に那須の与一扇を射たる躰そと学うで御見せ候へ」と遮つ

て、仕方咄に移行する。また、

八嶋ノ間ニ那須ノ語り勤ムル時ハ右ノ如ク常ノ語りノ半ニ脇ニ好マス方花アリ美事ニテ宜キ也、併番組ニ兼テヨリ八島間那須ト云事書頭シアル時ハ常ノ語りノ前段ナシニ始ヨリ脇ニ那須語り好マスベシ、

と言う。所望するのはワキだが、実は狂言方の注文によつて行つてゐる事が明かである。この語りが仕方咄として洗練され、狂言方の習物となつた事がその原因であろう。

信長の時代の出来事を発端として、家康の時代に形を為し、脇方主導から狂言方の演出へと主体を変えて、この語りは展開して来たのである。

この語りは橋本氏の指摘通り、狂言記・諸流台本とも本文は語り本系平家物語に近い。ただし宝暦・文化・文政・天保などの上演記録を含む鷺賢茂本『鷺流替ノ間』には「又替」として『源平盛衰記』そのままの長文の本文を載せる。「しかたにてまなふて」とあるので仕方咄ではあつたらしいが、後の注記に「但シ此語余リニ長ク如何ニ候、常ノ那須ノ語りニテ可然」と記す通り、長すぎる。実らなかつた狂言方の工夫と言うべきか。

(文教大学名誉教授)